



県工業用地の売買契約を結ぶ沖繩丸和の北岡幸一社長(右)、県庁観光商工部長室

2千万円を投資する。沖繩丸和は官公庁発注事業の下請けで街路樹や原野の伐採などを手掛けている。草や枝葉の廃棄には年1500万円程度掛かるが、今後はその分を堆肥原料に活用できることにな

ループ会社の事業所として1983年に沖繩進出し、91年に法人化した。年商は約4億5千万円で、正社員22人を含む160人を雇用している。北岡氏がグループ7社の代表を務める。

委員会、インデックス沖繩)が9日、宜野湾市の沖繩コンベンションセンターで開かれた。全国から約200人が出席し、MICEを使った観光発展の可能性について議論した。

基調講演した観光庁の武井 隆 氏。インデックス沖繩 サミット システム開発のインデックス沖繩(浦添市、栗田智明社長)は9日開催された「沖繩MICEサミット」

残さず無駄なく飼料化

糸満市西崎。海邦ベンダー工業(本社豊見城市)のリサイクル工場で、3人の従業員が食物残さからビニールなどの不純物を丁寧に取り除き、発酵飼料を作る最新鋭プラントに投入する作業を繰り返す。

食品リサイクル

酵母発酵処理のため、塩分や油分(酸化剤)を無効化し、悪臭を抑えるため、残さ特有の鼻を突くにおいがほとんどない。約120本のドラム缶(約200kg)に入った飼料が発酵具合に応じて分けられ、運び出しを待っている。

第6部 循環型モデル ②

風をつかめ

◆29◆

レーザー加工で具内屈指の工業団地協同組合に属する県内飲食チェーンの工場など、3社などから譲り受ける日量約1・3トンの残さが生まれ変わり、3、4日に一度の割合でドラム缶20本が牧場に送られる。

技術力を持つ同社は、県内と広島県で飲食店3店を展開する多角経営で収益力を高めてきた。国頭村安田に開いたおもしろ牧場で、沖繩伝統の在来種アグーを「おもしろ豚」ブランドで生産している。自社の飲食店のメニューに取り込み、ネット通販での加工製品の販売も動き出している。

集めた残さを無駄なく、安全な飼料に再生する「循環型システム」の構築を目指し、約3500万円を導入した酵母発酵プラントが本格稼働したのは2009年10月。糸満工業団地協同組合に属する県内飲食チェーンの工場など、3社などから譲り受ける日量約1・3トンの残さが生まれ変わり、3、4日に一度の割合でドラム缶20本が牧場に送られる。

供給先確保に強み

神谷弘隆社長は「環境保全、省資源化を考え、安全

飼育する豚約320頭に供給する流れが確立している点

安心な食の循環を達成することとは生産者の務め。残さを地元中心に確保できていることは大きい」と話す。

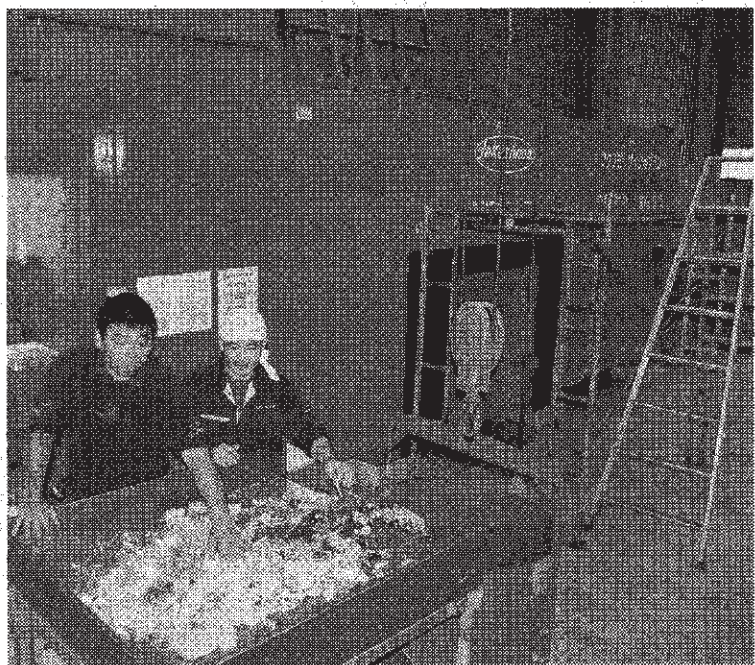
同社の強みは、自社牧場で

だ。神谷社長は「月約50頭ずつ増えている豚は年内に約400頭に達する。その時点で収支バランスが取れる」と見通した。

07年から食品リサイクル事業を手掛ける大鏡建設(那覇市)は、08年に農林水産省と環境省から食品残渣再利用事業者として県内で初認定された先駆者の存在だ。

糸満市西崎の工場で1日約2・3トンの残さの約3割が飼料となり、市販の飼料より安価で出荷される。平良武雄社長は「採算性はまだまだだが、2年後には軌道に乗る。食品リサイクルは離島県・沖繩に不可欠な成長産業だ。後に続く企業が出てほしい」と話す。

残さから肥料を製造して熱帯果樹生産に結び付ける新事業を構想し、平良社長は糸満市内に約6600平方メートルの土地を確保した。



飼料を製造する酵母発酵プラントの前で、飲食店などから集めた食物残さを仕分けする海邦ベンダー工業の従業員・糸満市西崎

(火一木曜日掲載)

(松元剛)